モモ「白鳳」のみつ症発生軽減に有効な着果量増加と早期収穫
【要約】近年発生が増加しているモモ「白鳳」の水浸状果肉褐変症（通称：みつ症）は、大玉で熟度が進んだ硬度の低い果実ほど発生しやすいため、着果量を 1.5 倍に増やして果実肥大を抑制することや、通常より早めに収穫することで発生を軽減することができる。
中山間農業研究所　作物・果樹部　　【連絡先】 0577-73-2029

【背景・ねらい】

近年の気候変動等の影響により、果実内部が水浸状に変化したり褐変する果肉障害（通称：みつ症、図１）が増加している。そこで、本県の基幹品種である「白鳳」について、みつ症が発生しやすい果実の特徴を明らかにするとともに、先行研究で報告されている果実肥大抑制や熟度を指標とした早期収穫によるみつ症発生軽減効果について検討した。

【成果の内容・特徴】

1　みつ症の発生率や発生程度は、果実重が重い大玉果実ほど高い（図２）。また、収穫時の果肉硬度が低い成熟の進んだ果実ほど高く、特に果肉硬度 1kg 未満の果実ではみつ症の発生リスクが高い（図３）。

2　本摘果時に着果量を通常の 1.5 倍程度（葉果比 45）とし果実肥大を抑制することにより、みつ症の発生を軽減することができる（表１）。

3　収穫時の熟度基準（JA ひだもも選別規格表）を慣行の No.２から No.1.5 に変更して数日早く収穫することにより、果実品質を低下させることなく、みつ症の発生を軽減することができる（表１）。

4　着果量の増加による果実肥大抑制と早期収穫を組み合わせることで、より高いみつ症発生軽減効果が期待できる（表１）。

【成果の活用・留意点】

1　「白鳳」以外の品種については、発生軽減効果は未確認である。

2　着果量の増加は、樹勢が強く大玉で毎年みつ症が多発している樹に対する軽減対策として活用する。

3　早期収穫は、「みつ症」の多発が予想される場合の対策として活用する。

4　果実袋の被袋及び除袋は、慣行どおり適期に実施する。

【具体的データ】

図１　みつ症が発生した「白鳳」の果実

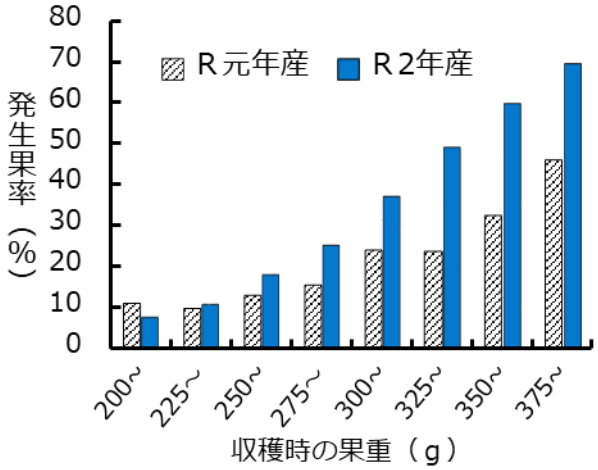

図２　収穫時の果重とみつ症発生の関係

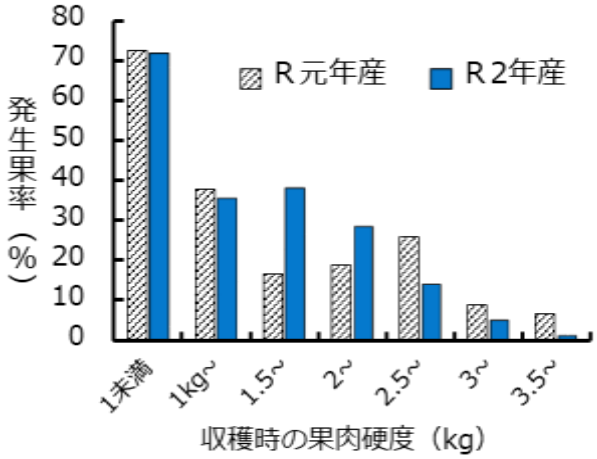

図３　収穫時の果肉硬度とみつ症発生の関係

表１　「白鳳」における着果量と早期収穫がみつ症発生に及ぼす影響（R3年）

試験区[z]		調査果数	平均果重	糖度	みつ症発生	みつ症発生
着果量	収穫	（果）	（g）	（Brix%）	果率(%)	指数（0-7）
慣行	慣行	210	327	15.1	46.6	1.6
1.5倍	慣行	251	305	14.7	29.1	1.0
慣行	早期	201	310	14.9	26.3	0.8
1.5倍	早期	178	296	14.6	17.1	0.4

[z] 慣 行：慣行の葉果比60での着果量、慣行の熟度基準No.2での収穫
1.5倍：葉果比45で慣行の1.5倍での着果量
早 期：収穫時の熟度基準を慣行のNo.2から1.5に早めた収穫
みつ症発生指数：0（無）～7（多発）の７段階で評価

研究課題名：農業の地球温暖化適応プロジェクト事業「夏期冷涼な気候を生かした果樹産地における地球温暖化対策技術開発」（平成 30～令和３年度）

研究担当者：宮本善秋